

メディア文化論⑪「リキッドモダン・メディア論」の試み

（その1）場所からの解放

水 野 博 介*

<目 次>

- 1 はじめに
- 2 リキッドモダンとは何か？
～近代史の現段階の比喻～
 - ① 近代の流動性
 - ② 自由と解放
 - ③ 個人化
 - ④ 人間的絆のネットワークの解体
- 3 リキッドモダンにおけるメディアの現状
- 4 リキッドモダンにおける「監視」の概要
 - ① パノプティコン時代
 - ② ポスト・パノプティコン時代
- 5 結語

1 はじめに

筆者はこの3月に『ポストモダンのメディア論』（学文社、2014）を上梓した。この著書は、その「序」において記しているように、現在を「ポストモダン」期であるとして、その文化やメディアのあり方を整序しようとする、一種の“思考実験”を試みた。そこにおいては、「ポストモダン」期を“過渡期”として位置づけ、“混沌”とした文化状況にあることを主張している。

* みずの・ひろすけ
埼玉大学教養学部教授、メディア論

ところが、現在を「ポストモダン」という、どちらかと言えばニュートラルな捉え方よりも、もっと明確な特徴をもった時期として見る見方もある。例えば、ジークムント・バウマン（2001＝2000）は現在を「リキッドモダン」という風に捉えている。これは、かつての社会制度も人間的なつながりもゆらぎ、大変に流動的で不安定な社会状況を踏まえてのことである。そして、現在を「監視社会」あるいは「管理社会」の進展した社会の姿であるという面を捉えるには、むしろ、この「リキッドモダン」という考え方の方が、より明晰な分析ができる可能性がある。

本稿は、現在を「リキッドモダン」であるとするバウマンの主張に沿って、社会の現状を概観し、特に「監視社会」および「管理社会」的な側面について考察すると同時に、そのような社会の現状をもたらし、強化することに寄与していると考えられる「メディア」についても概観することが目的である。ただし、本稿にも、筆者の著書と同様に、思考実験的な「試論」という位置づけを与える。

ここで行う具体的な作業としては、リキッドモダンに関するバウマンの主著『リキッド・モダニティ 液状化する社会』と、現代における「監視」の研究を行っているデイヴィッド・ライアンがバウマンとメールを用いて繰り返した対話をまとめた『私たちが、すすんで監視し、監視される、この世界について リキッド・サーベイランスをめぐる7章』という2冊の書籍を熟読し、そこから上の述べたような3つの側

面（現代社会の現状・監視社会の側面・メディア）についての彼らの考えを抽出し、わかりやすくまとめるということである。

2 リキッドモダンとは何か？

～近代史の現段階の比喻～

①近代の流動性

バウマンは、近代史の現段階の比喻として、「流動性」と「軽量性」が適切であると述べている（同書、5頁）。ただし、近代は、その当初から流動的でもあった。すなわち、マルクスとエンゲルスによる『共産党宣言』には、「堅固なものを溶解する」という語句があり、それは「慣例に凝固まり、あまりにも停滞的で、非順応的で、変化につよく抵抗した社会にたいして、活発な近代精神がおこした行動のことをいったもの」（同）だという。しかしながら、その結果生まれた「自由」によって逆に「秩序の硬直性」（同書、8頁）がもたらされたという。しかも、現在は、かつて存在し、革命をもたらした「秩序や体制を政治問題化する力」の“崩壊”（同書、9頁）が起きているという。

にもかかわらず、現在は再び社会が“流動的”だというのは、「つながり」が「坩堝に投げこまれ、溶かされかけている」（同）からだと言っている。ここで言う「つながり」は、親子関係のような人間関係のみならず、伝統的な制度や枠組み、さらには指針や規則のような、個人と集団を結ぶものも含めて考えられているようだ（同書、9・11頁）。今や、「液状化の力」は、「ミクロ」段階へと降りようとしているという（同書、11頁）。

また、デイヴィッド・ライアンは、ジークムント・バウマンとの対話の書（バウマン&ライアン、2013）で、現状を「あらゆる社会的形態が急速に溶解してしまっ、新しい形態をま

うことができません」（同書、15頁）と述べている。さらに、「権力と政治の分離」（同書、18頁）が生じることを述べている。先にも述べたように、マルクスとエンゲルスの場合も近代初期に関して、「堅牢なものがことごとく溶けて雲散する」という見解を出していたが、それ以上のことが今や起きているとする（同書、14頁）。

②自由と解放

「自由」や「解放」という概念はまさにモダン期のものであり、一般に、中世における身分や土地などからの解放によって、人びとは自由になったとされる。西洋古代におけるギリシャやローマにも「自由人」はいたが、彼らは対照的な「奴隷」の存在を基盤としていた。

しかしながら、ポストモダン期の現在、現実とはそうではないのに「自由であるかのように感じられている不自由がある」（バウマン前掲書、23頁）とする。確かに、現在、我々は金銭が許す限り、世界のだいたいの場所に行って、さまざまなものを見聞させる「自由」がある。ただ、その場合には、パスポートやビザが必要になることがあるし、入出国の際には「チェック」を受ける。

そのようなチェックをかいくぐろうとして失敗したと思われる事例が先日発生した（以下は、「NAVERまとめ」サイトの情報を要約した）。2014（平成26）年1月18日に北九州市若松区の沖合で倒れた人を乗せたゴムボートが漂流しているのが発見されたが、荒天のため救助できず、その後、ボートだけが見つかったが、20日になって防波堤近くの海中で男性の遺体が見つかった。目立った外傷はなかったが、死亡推定時刻は13日より前とみられる。遺体は、韓国に出張中の内閣府の30歳のキャリア官僚だった。彼は、アメリカのミネソタ大学に留学中で、そこから韓国に出張した後、行方不明となっていた。

この事件に関して、同じく2月6日(木)朝のテレビ朝日の番組「モーニングバード」では、その官僚は韓国に入国した形跡はあり(パスポートケースを紛失し届けるという「アリバイ工作」のようなこともしていた)、何らかの理由で、日本には入管を経由せずに帰国しようとして失敗したのではないかと、というような推測が述べられていた。

我々は、裸で往来を歩けば逮捕される。何でも自由で解放されているとは言えない。そのような自由を享受したければ、自宅などのプライベートな場所や、ある特定の地理的範囲内で全裸を謳歌する「ヌーディスト・クラブ」に参加する必要がある。「自由」のためには、そのような「不自由」を甘受しないとイケないのだ。

このように考えると、我々、ポストモダン期に生きる人間は、「自由」もあるが、むしろいろいろな「不自由」を甘受して生きているような気もしてくる。ただ、日常的にそれを「不自由」とは感じていない。自由を手にするために必要な「手続き」を踏んでいるのだ、という風にしか思われない。それが、「不自由」そのものと表裏一体であることを感じてはいない。

③個人化

かつて近代化を担ってきたのは、「組織」であった(例えば、フォーディズムの工場や官僚組織)。もちろん「個人」も存在しているが、個人は、組織のなかでこそ能力を発揮でき、責任を負うことが可能であった。ところが、近代に特有の「理性によって担われる仕事は、いま、分割されて(いわゆる「個人化され」)、個人の勇気とスタミナ、個人的才能と、手腕にまかされることとなった」(バウマン同書、39頁)という。「進歩の主な担い手(さらに重要なことに、責任の所在)は個人に移った」(同)のだ。このことはウルリッヒ・ベルクが『危険社会(リ

スク社会)』で言うように、今や、さまざまな「リスク」が「個人化」されているという主張に通じるものであろう。今の時代は、すべからず、「自己責任」に帰されるというわけだ。

ただし、日本で「自己責任」ということが世間で話題になったのは、2004(平成16)年4月に、イラクで日本の市民活動家やジャーナリスト計5人がイラク人武装勢力によって拘束された事件に対して、「声高に『自己責任論』が出てきたのは、彼らを拘束した武装グループから発せられた解放条件に『自衛隊撤退』があり、被害者家族や支援者たちがそれを国に強く要求したところからである」(特定非営利活動法人 環境市民)という状況認識は間違いないところであろう。

ただ、「そもそも『国』とは、個人がそれぞれの幸福の実現のため、権利の一部を国に預け、かつ義務を果たすことで成り立っている。国にはその付託に応える責任がある。今回耳にした『自己責任論』の中には、国の成り立ちそのものを見誤っているものもないだろうか」(同)という考え方は、一つの見解ではあるが、絶対的な真理というわけではない。「国家」がそれほどに諸個人を最終的に守ってくれるというような「契約」は、どこでも交わされていない(もちろん、「人道的な配慮」はなされうるが)。

それに、現実において、例えば日本国という国家は、現憲法下でも「個人」を大事にしているとは言えない(むしろ、企業や組織の方が大事にされてきたと言える)。国民が「臣民」あるいは「天皇の赤子」とされた旧憲法下では、もっと酷いことがまかり通っていた(満洲や沖縄での状況あるいは無謀な戦争自体が組織の論理優先(「個人無視」)を雄弁に示している。

今や、そのような「個人」が、むき出しとなっているのがポストモダン期の「現状」である。「個人は宿命であって、＜中略＞個人化ゲーム

に参加しない自由はゆるされない」(同書、45頁)のであり、「現代人は挫折や不満を、他人のせいにすることができない」(同)のであろう。失業して、再就職先がなくても「自分磨き」をやらなかったせいであつたり、「コミュニケーション能力」が低いせいであり、まさに「自己責任」で結果を受け容れるべきであり、その際に(理想的な共産主義社会のように!?)国家がなんとかしてくれるわけでは必ずしもないのだ(最低の生活保証=生存保証?は一応なされるが、再就職先を一生懸命見つけてくれはしない)。

④人間的絆のネットワークの解体

社会の「流動性」、それに権力の「流動性」は、実は「社会的ネットワークの瓦解」や「集団的行動の崩壊」(バウマン同書、19頁)と密接に関連するとされる。具体的に、「人間的絆やネットワークの崩壊、もろさ、弱さ、はかなさ、不安定性」(同)が「流動性の促進、延長を可能にした」し、また、「社会的崩壊」は「権力を成立させる絶対条件」(同)でもあったとされる。

この後者の命題については、具体的な事例として、直ちに「全体主義」を連想する。しかし、この場合、「流動性」は、人びとがそれ以前にもっていた絆を失った「アノミー」(デュルケム、2005=1893)状態にあるという初期条件を意味するが、できあがった社会は、むしろ“固定的”な規律社会になると思われる。例えば、人間的な絆を失った人びと間で、「相互監視のネットワーク」が生まれるであろう。したがって、この例はむしろモダン期における事例となろう。

「流動性」がその社会の権力を成り立たせる条件であると同時に、その社会の状態の結果でもある(その状態を強化する)という事例は、まさに「現在」であり、「リキッド・モダン」の社会なのであろう。しかしながら、「ネットワーク」の瓦解がそのまま放置されたり、コンピュ

ータ・ネットワークのような代替物さえも存在しないとすれば、「現在」でもない。しかし、「相互監視」の必要はもはやない(監視は、別な手段による)、新たな時代の社会ではあろう。

3 リキッドモダンにおけるメディアの現状

この節で示されるメディアの現状は、社会や経済のあり方がすでに「モダン」のものではないということが前提になっており、その社会の現状を「ポストモダン」期のそれと捉えようが、「リキッド・モダン」のそれと捉えようが、基本的には変わらない。例えば、現代においては、高度化しグローバル化した資本主義のもとで、地上の人類の多くがかなり似たライフスタイルを身につけている(例えば、多くの人が、ユニクロなどの企業が売り出した大量生産品の衣服を身につけているなど)。

しかしながら、同じ社会において、メディアの基盤に関わるある面が、その社会の状況を「リキッド・モダン」と捉える方が、そのメディアをより理解できる場合もある。例えば、「移動の速度を速めようとする長年の努力が、いま、自然の限界にまで達した」(バウマン前掲書、15頁)という認識が現在生まれていることは、ほぼ確かであろう。ある距離を通過するのに従来必要だった「時間」の克服とも言え、これは、実質的に、情報伝達の速度の問題と言ってもよいであろう。

かつて19世紀半ばまでに、大西洋を超えて情報を伝達する最速手段(メディア)は「船」であり、例えば、アメリカ合衆国の首都ワシントンD.C.のフォード劇場で発生したリンカーン大統領の暗殺事件(1965=元治2年4月)が大西洋を超えてヨーロッパに伝わったのは、数週間後であつたろう。それが今や無線を用いた「携帯電話やスマートホンあるいは衛星放送」

という、光の速度で情報を伝達できるメディアが多くの人びとによって日常的に使われている。今、リンカーン殺人と同じようなことがワシントンで起きたとすれば、直ちにヨーロッパでも知られるところとなる。

同じ「移動」であっても、むしろ「空間」の移動に重点を置いた状況の変化がある。バウマン（同書、17頁）は、かつての「近代的現象のひとつに、定住型生活者による、遊牧型民族、移動型生活様式への攻撃」があったとの説を紹介している。実際に、近代ヨーロッパでは『土』が『血』よりも優先されるようになった」（同）という。ところが、それに対して、「流動的段階の近代では、遊牧民的、超領域的エリートが、定住型の多数派を支配する」（同書、18頁）という新たな状況が生まれているのだ。この場合も、メディアとしては、やはり携帯電話やスマートホンといった、まさに“移動型（モバイル）”情報機器がキーになっていることは確かであろうが、基盤としては、ポストモダンの議論と同様に、インターネットや航空路線の拡張、それにいわゆるグローバルな「帝国」（ネグロ&ハート、2003=2000）の存在があろう。あるいは「EU」の出現も寄与していよう。バウマンによれば、「世界的権力」は「流動性」を「みずからの強さの源、無敵の要因」（同書、19頁）として認識しているのだ。

バウマンも「携帯電話の出現は、空間依存にくわえられた象徴的な『最後の一撃』だったのだろうか」（バウマン同書、15頁）としている。これに関連して、かつて家庭の電話（「家電 [イェデン]」あるいは「固電（固定電話）」）に必要だった「差し込み [プラグ] は時代遅れ、悪趣味」（同書、20頁）であり、「ネットワーク」とはもはやつながっていないことを象徴している（同）。

他方で、『大きいこと』は『よいこと』でな

く、むしろ、非合理的と考えられるようになった」（同書、18頁）という。つまり、「より小さくなること、より軽量になること、より動かしやすくすることが、進歩と改良の意味でもある」

（同）という発想は、モダン期の延長にある考え方であって、ポストモダンのではないと思われる。「身軽に動きまわることのほうが、権力や力に有益」（同）という、あからさまな考え方も同様である。

4 リキッドモダンにおける「監視」の概要

ライアンの解説では、「リキッド・モダニティ」という概念は、「監視を単なるテクノロジーの増大や権力による把握の増大以上のものとみなす、より広い文脈（コンテキスト）を提供してくれます」（バウマン+ライアン前掲書、27頁）という。言い換えれば、「監視」において「質的」な変化があったということであろう。ここでは、ごく簡単に、「パノプティコン」を巡る議論を紹介しておく。

①パノプティコン時代

モダン期の「監視」の典型とされるのは、ジェレミー・ベンサムが構想し、ミッシェル・フーコーが「近代的権力の究極の比喩としてもちいた」（バウマン同書、14頁）ところの「パノプティコン（一望監視装置）」であった。

バウマンは、この「パノプティコン」は、今や極めて限られた場所でしか用いられておらず、ポストモダン期あるいはリキッドモダンの時代の象徴ではないとしている。

なぜなら、バウマンによれば、パノプティコンでは、監視する側もされる側も、結局はその「場所に拘束され」（同）のであり、「時間を規則化する側が、自由に動けるわけではない」（同）とする。もう一つの問題は、場所を確保

し、監視人を雇ったり、監視に必要な作業などのコストが相当にかかるということであった（同書、14・15頁）。

②ポスト・パノプティコン時代

バウマンが言うには、「ポスト・パノプティコンでは、人間の運命を左右するような権力レバーを握る者たちは、いつでも、だれの手もとどかないところまで、逃げていくことができる」

（同書、16頁）。これは、「相互関与の時代の終焉を予感させる」（同）さまざまな状況の一つなのであろう。つまり、今や当事者同士が対峙せず、「いまの主要な権力手段は、逃避、流出、省略、回避」（同）だという。

簡単に言えば、今や権力はどこに居るのか“不可視”である。これはセキュリティの問題からも必然なのだろう。かつて、冷戦時代に、「中央集権」から「分権」的なネットワークに移行したが、それは言ってみれば“多頭”的なあり方ではあったが、必ずしも不可視ではなかったのだ。

③新たな監視のもつ不透明性

今日のビッグデータの時代には、さまざまな形で、密かに個人情報が収集され、分析されている。しかしながら、その「軸」になるものは、「社会的振り分け（social sorting）」（バウマン＋ライアン前掲書、27頁）であるという。これについての詳しい解説は、次稿以降にゆだねることにする。

5 結 語

今回は、「リキッドモダン」の状況を十分記述するだけの時間的余裕がなかった。あと2回、この続きを書くことになるろう。

<文 献>

ジークムント・バウマン『リキッド・モダニティ 液状化する社会』森田典正訳、大月書店、2011年〔原著：2000年〕

ジークムント・バウマン＋デイヴィッド・ライアン『私たちが、すすんで監視し、監視される、この世界について リキッド・サーベイランスをめぐる7章』伊藤茂訳、青土社、2013年〔原著：2012年〕

ウルリッヒ・ベック『危険社会——新しい近代への道』デュルケーム『社会分業論』田原音和訳、青木書店、2005年〔原著：1893年〕

ミッシェル・フーコー『監獄の誕生——監視と処罰』田村俣〔ハツ〕訳、新潮社、1977年

デイヴィッド・ライアン『監視社会』川村一郎訳、青土社、2002年

アントニオ・ネグリ&マイケル・ハート『帝国』水嶋一憲他訳、以文社、2003年〔原著：2000年〕

<HP>

特定非営利活動法人環境市民「みどりのニュースレター 2004年6月号（133号）」

http://www.kankyoshimin.org/modules/cef/index.php?content_id=55